1. いじめのある集団の構造は基本の4層構造＋2層の6層の構造に分けられる。被害者、加害者、観衆、傍観者＋仲裁者、被害加害者の6層である。被害者層は力への服従や中心的価値への志向が強い為、権威や集団の意思に服従する傾向がある。その反対に、加害者層は力への自立が強く、中心的価値への志向が低い為、権威への反発や利己的欲求の充足による自治を行う傾向になる。観衆層も加害者層と同様に被害者層と反対の価値観を持っている。しかし、加害者層ほど力への自立が強くない為、いじめに加わらないが積極的に肯定している。傍観者層は力への自立と中心的価値への志向が強い為、周りに興味がないが、それがいじめを暗黙的に肯定している。
2. 学級の雰囲気の一元化や歯止め作用の欠如により、学級集団に「いじめ許容空間」が発生すると、いじめる側の「いじめ衝動」といじめられる側の「ヴァルネラビリティ」に関係性がうまれ、いじめ現象が発生する。よって、いじめの起きにくい教室では、教師の学級雰囲気の改善により「いじめ許容空間」をつぶしたり、各人がなんらかの形で自己のヴァルネラビリティを抑制したり、いじめる側に「正義感」を醸成して「いじめ衝動」を粉砕したりして、3者のいずれかに抑止力が働いているのである。反対に、いじめの起きやすい教室はこれらの抑制を怠っているのである。
3. いじめの過程には「孤立化」、「無力化」、「透明化」の3段階がある。孤立化の段階では、被害者がいかにいじめられる価に値するかをＰＲし、傍観者や教師、家庭から被害者を孤立させる。無力化の段階になると、加害者は過剰な暴力により被害者の反抗心をなくさせる。特に大人に助けを求めることに対しては暴力が与えられる。この段階までは、注意して見ればいじめを発見することはできるし、被害者は助けを求めるサインを出している。しかし、透明化の段階に入ると、被害者にとって加害者との対人関係が唯一のものとなり、感情的にも隷属していく。こうなると、被害者は大人の前で加害者と仲良しを誇張することもあり、いじめはまったく見えなくなる。
4. いじめを起きにくい教室にするには、学級の雰囲気を支配する価値基準を知ることが重要である。教師の力が強い教室では、逆らえない雰囲気や競争意識が強く、皆でがんばろうという雰囲気の一元化が起こり、集団のお荷物になってしまう者がいじめられ易くなる。よって、競争をさせないことでいじめを起きにくくさせることができる。反対に、教師の力が弱い教室では、教室が荒れ、少数の生徒の利己的欲求の充足、つまり、歯止め作用の欠如の為にいじめが起こりやすくなる。よって、学級にリーダーなどを作り、いじめる側に正義感を醸成し、いじめ衝動をなくすことでいじめを起きにくくさせることができる。